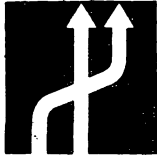


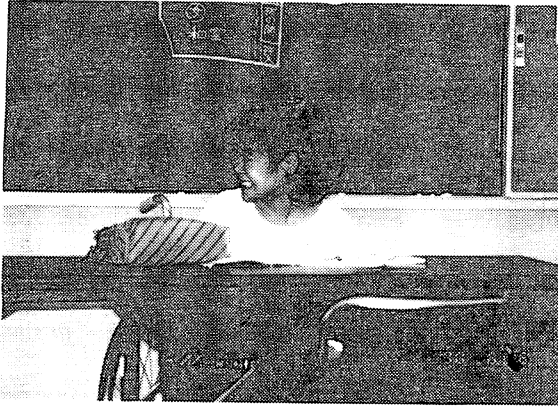
サロン・あべの

<サロン・あべの>NO. 49 平成 2年 7月21日(土)発行



親ばなれ子ばなれ「私の自立」

六月の出会い



川嶋雅恵さん

平成二年六月十六日(土)午後一時～四時、育徳コミュニティセンター二階研修室で、「障害者の親ばなれ 子ばなれ——私の自立」と題して、川嶋雅恵氏をパネラーに迎え、お話を伺った。

参加者十四名、司会は南光龍平氏。

● 自立への芽ばえ

一九六一年堺養護学校に入学し、母親と一緒に通学していた毎日、両親と弟、猫一匹の暮らしで、何の不自由も覚えないう生活であった。ところが、高校生になった時母親が子宮筋腫で入院しなければならなくなった。男手ばかりの生活になって、初めて介護を受けるしんどさを知る。年齢も花も恥らう年ごろになっていたので、弟や父親にトイレ介護やお風呂介護を頼めなかった。親類の人にも、病院の方と自分の世話を頼むにも限度があることを知り、一時間も、二時間も時間をかけて自分のことをした。時間をかければ出来ることがわかったのを機に、本気で自分の将来のこと、自立について考えた。

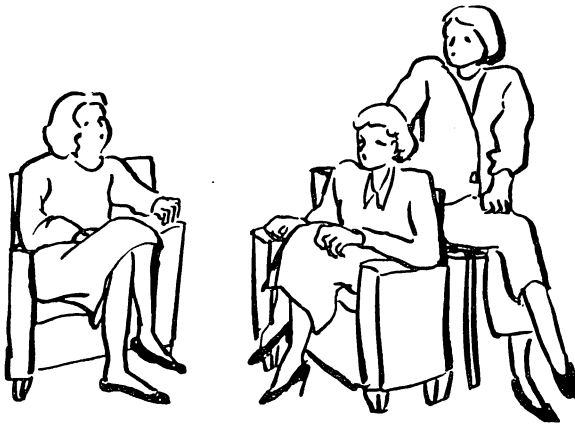
● 試みて：失敗

一九七三年堺養護高等学校を卒業して、近所の編物教室に週二回通う。先生と二人きりの教室、家では親との会話だけで、日々にあせりが出て一種のノイローゼ状態になり、親ともよくケンカをした。

このような生活を過している時、堺養護

学校の同窓生で作っているW・C（ウィル
チェヤールクルマイス）に誘われて、一人
で外出する術と楽しさを知った。

七八年に編み物教室を開所し、地域の作
業所にも入る。自分の仕事を持ち、知人も
多く出来たので、自立の時を考え、友人の
住宅を一週間借りて生活をした。介護人を
捜す電話にあけくれた毎日であり、介護者
と合宿気分が過ぎてしまい、とても普通の
生活のリズムとは言えなかった。



短期間だからこういう事になると思い、
山口県にある「土の会生活訓練所」に一年
間入所した。障害者にとって、台所や洗濯
がしやすいよう改造されていて、個室にな
っていた。家事などまともにした事がなか
ったので失敗ばかりして、同居者に心配ば
かりかけたが、この時の経験が生活の知識
となって、今も役にたっている。

しかし、一人で何もかもしていると、体
に負担がかかって、三ヶ月に一度位、首や
肩が痛んで寝込んでしまった。一人での生
活は無理と判断して、大阪に帰ってきた。

そして、介護者を捜して自立すべく、介
護者（大学生達）の集りやすい場所として
東淀川区で住居を捜したが、適当なところ
が無く、堺で家を見つけた。ここで自立生
活を始める予定であったが、中止となった。
その理由の一つは、介護者の通いが遠方
になったことと、一年単位で学生の移動（
短大生等）があり、後継者に不安があった
こと。又、生活保護を受けるに当り、親と
の話し合いがうまく運ばなかったことが上げ
られる。

これらの行動は、全て事後承諾という形
をとっていたので、親との闘いは、泥沼状

態となっていた。母親は徐々に理解を示し
てくれ、色々と協力もしてくれたが、父親
は最後まで頑として反対の態度をとって
いた。

親が健在な間は、一緒に暮らせばよい、
親がいなくなった時、身の振り方を考えれ
ばよい。弟もいることだしと言った。

しかし、独立した弟が面倒を見るとい
うことは、その嫁さんに世話をかけるとい
ことになる。自分の気持としては、耐えら
れない。だから、親の元気なうちに自立を
考えたいと思ったが、理解してはもらえな
かった。

● グループ・ホーム設立

一九八六年「ひろがりフェスティバル」
をきっかけに中部障害者開放センターに
関わり、大阪でのグループ・ホーム作り
に組み始める。場所探し、家探しに苦
労したり、資金集めにチャリティーの
映画上映したり、大きな難関を超えて
一九八九年五月東住吉区にグループ・
ホームを開設した。一軒の家に四人
（男二人、女二人）の重度障害者が
住み、各々が個室を持ち、二四時間
介護保障の為に専任の介護人と、

パートの介護者、それにボランティアの学生方に四人共有の介護を依頼して、共同生活を送る。

日々の献立や介護調整、会計、広報等は障害者各自が担当する。言語障害者が三人いるので、各々のコミュニケーションに苦労するが、お互いに理解していこうと努力している。近所の人達も最初は、いぶかしげにみていたが、今は色々と声をかけてくれるようになった。

市のグループ・ホーム運営費補助と、市の介護人派遣事業費に入居者の個人負担分をプラスして主な収入源として運営している。支出は、専任介護人二人の給与、パートとボランティアへの支払、水光熱費（共有部分）事業費（共有の電話代）その他（町会費・火災保険等）となっている。

なお食費等は、個人負担となっている。共同生活をしているが、個室を持ちお互いの自由は尊重している。

ここを終の住家とするのではなく、ここでの体験を生かし次のステップへ踏み出せるようにしていきたい。

新しい体験者を養成し、第二、第三のグループ・ホームを作っていけるようにした

いと考えている。

● 一人住い

今年の三月から、次のステップとして、同じ区内でマンションを借りて一人で生活を始めた。グループ・ホームの一員として通所の形をとり、介護も受けている。午前中とホームへ行く時、午後の帰宅時と、自宅内での種々の用事をしてもらっている。その後は、翌朝まで一人で過している。

両親とは、意見のくい違いで色々衝突もしてきたが、今は自立生活に入れてよかったと思っている。親元を離れて初めて、親のありがたさを知りことも出来たし、親を人生の先輩として見ることも出来るようになった。今は、よくぞ、ここまで育ててくれたと感謝している。

「自立」と一口に言うが、本人の自覚が大切であり、その考えを押し進めていけるだけの情報と行動力が必要であり、それらに伴う不安や迷いなどは、親に見せられないしんどさもあるが、子供はいずれ成人して独立していくもので、それは障害者も健全者も同じ事と思う。お互いに上手に親ばなれ子ばなれをしていきたいものである。



雨と焦げた飯

岡知史

もう六、七年も前のこと、ぼくがまだ大学院生だったころの話である。

その日は雨が降っていて、研究室の曇ったガラス窓からも、細い雨が絹のように垂れて、かすかな風にゆらゆらと揺れているのが見えた。

十人も入れればいっぱいになりそうな、その研究室には、四回生の女子学生たちがつくった手作りの料理の品々が並べてあった。先生たちはお酒を飲んで機嫌がいい。その日はなにかのパーティだったはずだ。楽しいような笑い声が響いたが、料理はあまりにも多かつたのでついぶん残っていた。

さあ、そろそろお開きにしようと先生が腰を上げると、ぼくたちは料理を片付け始めた。先生が「おまえは一人暮しなんだか

ら、みんなもつて帰って家で食べなさい」と、残ったご馳走を指さして言った。ぼくは、もう充分ですと言つて、それをみんなゴミ箱に捨てた。もつて帰ろうにも、容器らしいものはどこにもなかつたし、ここに置いておいても、腐るだけだったからだ。

「じゃあ、お先に失礼します。今日はボランティアに行く日なんです」と、ぼくは早口に言つて、傘をもち、部屋を出た。外は冷たい雨がまだ降り続いてた。水たまりを飛び越えるようにして、早足で駅に向かう。

その日の行き先は、西成区の釜が崎と呼ばれている地域だった。ぼくは何か月前から、そこで「炊出し」の手伝いをしてた。

大きな食堂で使うような釜を二つ、リヤカーにつんで、労働組合の事務所から出ていく。「炊出し」は、いつもなら公園で行われるのだが、雨の日は大きな建物の陰になるところに行く。そこだと雨が当たらない。その場に行くとき、もう何十人という男たちが長い列をつくつて待っている。みんな無言だ。傘もささずに濡れている人が多い。長い髪がべつたりと、浅黒い顔にはりついている。

大きな釜に二つ、いっぱいにはいつた雑炊も、たちまちのうちに無くなつてしまう。焦げた部分が釜に張り付いている。ぼくは、金属のへらのようなもので、それを削り取るようにして取る。

ああ、これがうまいんやで、とひげをたくわえた男が笑つて腕を差し出す。

それもなくなつてしまつと、次はパンの耳を配る。近くの喫茶店の人の「カンパ」だという。

そのパンの耳を配つてくれと頼まれたこともある。ビニールの大きな袋にはいつたパンの耳をわしづかみにして、差し出された手に配つてみると、ああ、ぼくはいま何をしているのだろうなと思えてくる。

パンの耳や黒く焦げた雑炊を見ながら、ぼくは、小一時間前に捨てたパーティの残りを思い出す。

ぼくがああとき捨てたのは、ふつうの食べ物。しかし、いまぼくが配っているもの

はきつと食べ物以上の何かなのだ。

これは、地域の労働者たちが互いに支えあう形であり、全国から届く心の表れなのだろう。

とすれば、それをぼくが自分の手で配っているものだろうか。

いや、それよりもこの場に居ていいのかどうか。ここは労働者たちの助け合いの場所。ぼくは他所者であり、入ってはいけない場所に入ってしまったのではないかとぼくはなぜここにいるのだろうか。なぜ、彼らと関わりたいと思ったのだろうか。なぜこの場に魅かれたのだろうか。ぼくは何を見何を知りたいと思ったのか。

途方にくれ、足場を失っていることを感じながらも、ぼくは週一度、半年間「炊出し」の活動に参加した。しかし、そこで友人らしい人を得ることはついにできなかつた。ぼくのなかの何かが誤っていたのだと思う。

今でも「炊出し」の通信が定期的に届く。こんどもう一度、あの場に立つことになったなら、ぼくはなにか別の関わり方ができるだろうか。

労働者たちの黒い雨傘の下で、途方にくれながら削った焦げた飯。そのにおいと色は、年月を経てもなお、雨とともにぼくの心に届いている。

● われらがあべのボランティア・ビューロー②

ビューローとサロンのあやしい関係？

いきなり唐突なタイトルで申し訳ありません。別にとりあえず変な意味はないんです。本当です。

では、どういうことかというところ、サロンというのには「ボランティア交流会」に入ってもらったり「ボランティアスクール」のイベントに出てみたり、何かとビューローとは縁があるんですね。まあ、サロンができた時のいきさつもあるんでしょうが、僕はそのあたりはあんまり知らないし、五年もたつていつまでもそんなことばかりじゃないとも思うんで、こちらでちょっと考えてみましょう。

で、サロンはボランティアグループかっというところ、どうも普通のボランティアグループとは違う（だいたいそんなに真面目には見えないでしょ）。もちろん、みんなやるときはやるんだけど、いつも継続的に活動をするわけではないんで、ボランティアらしいサービステキ型のボランティアのグループではないんです。

でも、ビューローの活動に参加してみようと思うのは、サロンっていうのは来た人を元気にするというか、何かやってみようかと思って思わずというか、その、いわゆる「ひとづくり」みたいなところは結構得意なんじゃないかなっていう気がするんです。

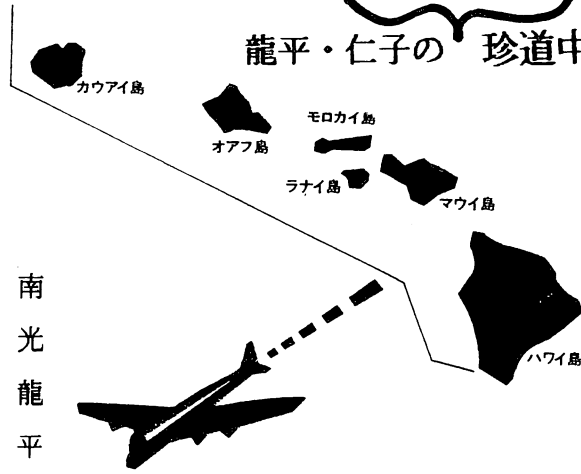
あべのに関わる者のはしくれとしては、あべのボランティア・ビューローには協力もしたいと思っています。できればサロンのいちばん得意な分野でやりたい。大きな声では言えませんが、よく言われる「行政育成型」のボランティアにはない、サロンならではの「熱さ」で。

そのためにはサロンもパワーアップしていかねければいかんと思うんです。サロン自身で努力しながら。

● 原田 仁

ハワイ

龍平・仁子の 珍道中



そして ハワイ

ホノルルの海岸通り、とくにワイキキを中心とした一帯には数え切れない程のホテルが林立している。今ではその多くが日本

の資本によって買い取られ、宿泊客もその多くは日本人。「夢のハワイ」というのもう昔話になってしまったかのようで、今や「アメリカの日本人による日本人のためのリゾート地」といった方が存外当たっているかも知れない。

それはともかく、電車ごっこスタイルの私達はそんな「ホテルの林」のなかを進んでいく。

途中、とあるビーチへの脇道に入る角に「ヒルトン・ハワイアンビレッジ」の看板。それも大きなソテツのような植物に立て掛けてあるだけのもののだが、その素朴さにひかれるようにその脇道に入ってしまった。道の奥はそんなに広くないビーチで、人の数も多くない静かなところだったが一つだけ驚く事があった。

それはトイレ。こんな小さなビーチにも、ちゃんとトイレが設けられてある。それも日本の公園なんかにあるような、臭いがツウ〜ンと鼻を突くような、どことなく不潔な「公衆便所」ではなくて、掃除が行き届いていてなんとも爽やか。もちろん、それだけではそれ程驚くことではない。私を驚かせたのは、ちゃんと手すりがつけられて

いて車椅子でも楽に使えだけのスペースをとってあること。あのわざとらしい「車椅子マーク」も見当らない。ごく当然といった感じで、こんな所まで障害者への心配



りがなされている。

素敵なことだなぁ、と思いを新たにしてまたあの「電車ごっこスタイル」で出発、思い出の彼の地(すこしオーバーな表現?)へと向かう。

目指すホテルには無事着いたものの、余りに広いホテルのなかを半ば迷いながらうろろ。結局行き着いたところは、日本の「風月堂」の経営する喫茶店。内心「なんのこっちゃねん」と思いつつも、ヨメさんとふたりコーヒーを飲みながら、しばらくは思い出にふけていた。

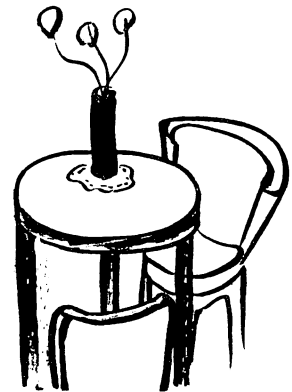


さて、いよいよハワイ最後の夜。全員で「タンタラスの丘」に登り、ホノルルの夜景と南国の星空をしっかりと瞳の奥に焼き付けて、楽しかった旅のエンドマークにする。

最初希望していた五泊七日よりは、いろいろな事情で一日短くなってしまったが、充分ハワイをエンジョイできた、南の国への旅も無事終った。

添乗員のNさん、お疲れさまでした。飛行場や航空会社のみなさん、ご面倒をおかけしました。そして、ハワイで出会うことが出来たたくさんの人達、優しくしていただいてありがとうございます。感謝の気持ちと、出会えた喜びを精一杯こめて大きな声で叫びたい。「アローハ」
(おわり)

美智子のこんな話



岸田 美智子

デート介助の要請について

昨年の九月から施設の障害者外出サービス活動に取り組んでいます。その中では、買い物や映画、なかには天理教へ、などの個人的な外出が多く要請されます。これらは、地域にいる私達ならば、気軽に出る外出ですが、施設の障害者は、まだまだできないのが現実です。とりわけ施設の中では、男女交際なども多くの施設では禁止

されています。でも、外出サービスではデート介助なども、できる限り応援していかうと思っています。実際、最近このデート介助の要請がありました。このような種類の要請には、いくつかのむずかしい問題があります。

一つは、障害者のカップルと共に介助者が、車椅子がはいりやすいホテルめぐりを実行しなければならぬことです。健常者でも、このようなホテルの使い易さや場所などあまり知らない人が多いのです。それに、このような介助は、いやがられる介助者の方が多いようです。

もう一つの問題は、障害者のカップルがホテルの部屋でいる間は、介助者は、消えてほしいという要求があるので、この二〜三時間の間の過し方です。二〜三時間と言えば中途半端でなかなか時間をつぶすのに疲れてしまうそうです。

事務局の私達も、あまりいい案は思いつきませんし、思わずラブホテルの事をくわしく知っている人がいないかなと思ってしまふ今日この頃です。

障害者のデート介助のむずかしさをしみじみかみしめています。



⊙ 車椅子で外に出る

柿岡 緑



日々の雑事の合間に室外に出ると、スーとした心の安らぎを感じます。

お馴染みの道を買い物へと商店街に入り、あの店この店と、豊富な品々を眺めたり、行き交う人々に接して進むと、心がウキウキとぼんやりできます。慌ただしく活気に溢れた中に自分を見いだします。

狭い道幅の混雑の中で、立ち話をしている人、気付いて道を譲って下さるけれど、知らん顔して続ける人もいて…。立ち止ると往來にはすぐ行列が出来てしまい、つらい思いをします。それで混雑の時間は避けなければと、分かつてはいるが実行出来る

時は少なく、心はヒヤヒヤと小さくなっていても、堂々と車椅子で通る私、申し訳ないと思っっています。

先日、知り合いのお通夜に行った帰り道、やはり、同じ場所へ行かれる視覚障害者のお方が、一人でタクシーから降りられるのを見て、曲がり曲がり一〇〇Mばかりのその場所までご一詣し、外で待っていて、再び車で帰宅されるのを見送った時は、お役に立てたことに、一寸ホッとしたひとときでもありました。

迷惑をかけ、又、お世話になることの多い私ながら、健康で頑張りたいと思います。

井 感謝します井

カンパ・切手・冊子等、ご協力ありがとうございました。うございました。

お礼を申し上げます。

六月のカンパ 金二三〇〇円

大岩悦子、岡本栄一、黒羽玲子、

土屋由美子、牧口 明、山村貴司、

匿名二名様(敬称略)

五周年記念・五〇号記念にと、ご協力いただいた方も、ごいっしょに掲載しております。



∞ サロン・あべの紙の

朗読テープが出来ました ∞

「阿倍野区ボランティア連絡協議会」の朗読グループのご協力により、サロン・あべの紙の録音テープを作っていたいています。バックナンバーは三九号から、四八号の分があります。サロン紙朗読テープご希望の方は、富田までお申し出下さい。

(TEL06-691-1028)

お手紙ありがとうございます。

もし、(私の新しい生活に)興味がおありになるのであれば、もちろん あなたにお手紙を書くつもりです。

今回は、私たちのグループのことについて何がしか、お伝えすることができます。

私たちは、二週間前、ちょっとした旅行をしました。グループのメンバーが、私を招んでくれたのです。それは、日曜日だったので、私も参加することができました。

私たちは、ウンナの近くの小さな湖(バンニョ湖)にドライブしました。そして、そこで散歩したり、ボートを漕いだりしました。それから、私たちは、昼食をどっさりごちそうになりました。そのあと、動物園へ行きイルカのショーを見ました。最後

にレストランへ行き、コーヒーとケーキをいただきました。それは素晴らしい一日でした。太陽は輝いていました。そして、私は、昔なじみのお友達と一緒に楽しむことができたのです。

現在、私は病院で働いているので、グループの活動に参加するのに、十分な時間が持てません。最初、仕事は私にとって、大変厳しいものでした。しかし、今は、仕事が好きになりました。そして、仕事に対する意識を強く持つようになりました。

七月には、私は、休暇を取って美しい農場へ行こうと思います。静けさが欲しいのです。そして、そのあと、またお手紙を書こうと思います。では、お元気で。

ブリギッテより



＜サロン・あべの＞第49号

発行日 平成 2年 7月21日(土)

発行・編集＜サロン・あべの＞運営委員会

[大阪市阿倍野区阪南町6-3-26

電話(06)691-1028富田慶子]

印刷 セルフ社 電話(06)691-2365

[阿倍野区西田辺2-2-10

グレース鶴ヶ丘101号]

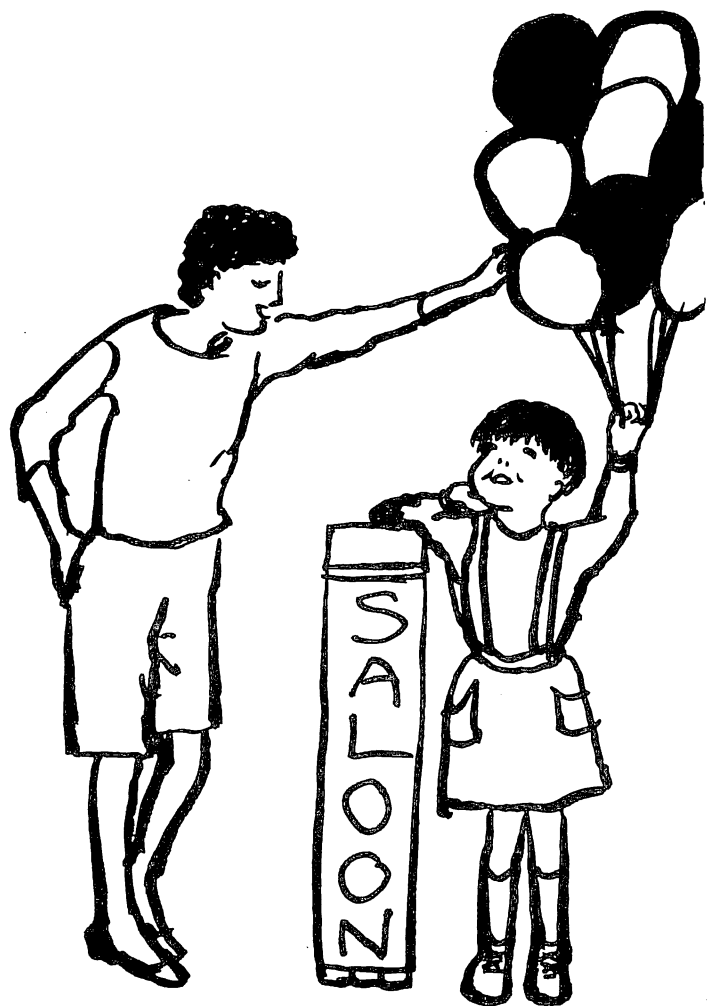
定価 ¥62.

編集後記

毎月の＜サロン・あべの＞の出会いの様子などを、次の月の第3土曜日発行の本紙に掲載し、皆様方にご覧いただいております。が、8月発行の本紙は、ご案内のとおり、50号記念の特別企画を企てておりますので、7月21日(土)の出会いの様子などは、9月の第4土曜日(第3土曜日祭日のため)発行の第51号でご覧いただくこととなります。ご了承ください。

その記念号の方ですが、たくさんの方からのご寄稿をいただき、8月18日の発行を目指して、スタッフみんな向う鉢巻でガンバっております。どんな記念号に仕上げるか、楽しみにお待ちください。(石)

お願い



今年も、きらめく太陽の下りあべのカーニバルが八月一九日(日)に開催されることになりました。

毎年、△サロン・あべのVは、サロンの活動を地域の皆様に知っていただくことと、△サロン・あべのVの活動資金を得るために「なんでも市」にバザー店の参加をしています。

このバザー店で、販売する品物…ご家庭に眠っている家庭用品(台所用品・食器・タオル・シーツ・石鹸・洗剤・雑貨類等)や、保存可能な食物(ソーメン・ノリ・食用油・調味料等)のご寄贈を、お願いしますと共に、値札付けや、当日の販売等のお手伝いをお願いしたいと思います。

ご支援・ご協力のお申し出を、お待ちしております。どうぞよろしく、お願いいたします。

○問い合わせ先

石田 律 || 阿倍野区昭和町三十一―一十三

☐ 六二二―二〇一八

井上憲一 || 阿倍野区西田辺町二―二一―

(有)社) 一〇一 ☐ 六九一―二三六五

辻本輝子 || 阿倍野区阪南町一四〇―五

☐ 六二二―二二四一

富田慶子 || 阿倍野区阪南町六―三―二六

☐ 六九一―一〇二八

中原友喜 || 阿倍野区丸山通り二―十一―六

☐ 六五二―二二〇八